



## 私と不妊治療

今回と次回は、カウンセラー自身のことを書きます。



私は25歳で結婚しました。当時の結婚平均年齢でした。結婚して望めば子どもができるのが当たり前とっていました。仕事、結婚、子どもという三種の神器は、普通に努力すれば手に入れることができるものと疑いませんでした。幼いころから極めて健康で病気をしたこともなく、不妊という状況が自分に関係することになろうとは全く想像もしていませんでした。

結婚当初は生活が軌道に乗るまで子どもはつくらないと計画しました。30歳に近くなってそろそろいいかな…とあって避妊をやめてもしばらく妊娠の兆候がありません。何か問題があるのかな？あるなら治せば出来るだろう…と割に簡単に考えていました。近くの総合病院の産婦人科に女医さんがいると聞き、受診したのが当院の院長のはるね先生でした。当時から、気さくな笑顔が患者さんに慕われ、人気のドクターでした。やさしそうな素敵な先生で良かった…と思いました。これがはるね先生との出会い、私と不妊の付き合いの始まりです。



一通りの検査をしても、特に異常は見つかりませんでした。治療はタイミング療法から徐々にステップアップして行きました。人工授精になった時は、これなら出来るだろうと、大きな期待を持ちました。でも、なかなか妊娠しません。タイミングを合わせようとすると、仕事で多忙な夫とのズレが生じて、ストレスが増して行きました。同僚や後輩達の妊娠・出産にも大きなプレッシャーを感じ、とにかくなんとか子どもを授かりたいと、当時とすればチャレンジャーでしたが、一大決心して体外受精に臨みました。

当時、体外受精を行っている施設は、特定の大学病院で、今のよう一般のクリニックではまだ行われていませんでした。私の通院していた総合病院でも、近々体外受精の設備を整え、開設するために、はるね先生が大学病院で体外受精の研修を受けている最中でした。先生からその大学病院を紹介されました。私は、医学の力があれば必ず出来るだろうとっていました。

今からちょうど18年前の6月3日、採卵前の病室で見たテレビのニュースでは長崎雲仙普賢岳の大火砕流が報じられていました。私にとって初めての入院でした。当時の採卵は全身麻酔、胚移植までの4~5日間は入院を要しました。入院費用も掛かるうえ、仕事や周囲と治療の折り合いをつけるのは本当にストレスでした。職場にも家族にも、この治療の話をするのは、まだまだかなりセンセーションで抵抗ありましたので、誰にも言わずに、仕事を工面して、旅行にカムフラージュして決行しました。

説明会などなかったので、採卵がどんな手順で行われるのかもわかりません。妊娠率も明確には知りませんでした。後で採卵数は知らされましたが、受精卵のグレードの話もなく、移植する数も主治医にお任せでした。凍結保存はまだなく、妊娠率を期待して、7個戻したと後から聞きました。多胎妊娠のリスク問題や受精卵の倫理的な基準もまだ確立していない時代でした。(つづく)



### 6月・7月のカウンセリング予定日

6月5日(金曜日)、6日(土曜日)、19日(金曜日)、20日(土曜日)

6月23日(火曜日) 不妊学級

7月3日(金曜日)、4日(土曜日)、17日(金曜日) 18日(土曜) 不妊学級

7月31日(金曜日) 8月1日(土曜日)